

2016 年度 入学 試験 問題

世界史 B

(試験時間 10:30~11:30 60分)

1. この冊子は、出願時に選択した科目の問題冊子です。科目名を確認のうえ、解答
- してください。
2. 解答用紙は、記述解答用紙のみです。
- 3. 解答は、必ず解答欄に記入してください。解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
4. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。
5. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。

I 以下の文章を読み、空欄A～Gにもっとも適切な語句を記入し、設問に答えなさい。
ただし、同じ記号には同じ語句が入る。(50点)

約46億年前に形成された地球は、これまでに多くの大規模な気候変動を経験してきた。約22億年前、約7億年前、約6億年前には、赤道地域を含む地球の全表面が凍りつくスノーボールアース(全球凍結)さえも起こったという。

直立二足歩行を特徴とする人類が誕生したのは約700万～600万年前のアフリカであるとされているが、その後も大規模な気候変動はたびたび起こり、人間の生活や歴史に大きな影響を与え続けている。例えば、約1万年前から地球が温暖化し始めると、人間は長い時間をかけてその変化に適応していった。その中でも、約9000年前の西アジアで始まった麦の栽培とヤギ・羊・牛の飼育はもっとも重要な変化とされている。これ以後、人間の社会は、狩猟・採集を中心とする獲得経済から農耕・牧畜による(A) 経済に移行したのである。

以下では、中世以降のヨーロッパを中心に、気候変動と歴史の関わりをみていこう。およそ10世紀から13世紀ごろまでのヨーロッパは、中世温暖期と呼ばれる時期にあっていた。北方では海の氷が解け、いっそう遠方まで船で航行することが可能になった。その結果、ノルマン人(ヴァイキング)は、ノルウェーからアイスランドをへて(B) に渡り、さらにはアメリカ大陸にさえ達していたという。また当時のヨーロッパ大陸では、局地的・一時的な食糧不足が起こることはあっても、総じて豊作の年が多かった。キリスト教信仰が強かったこの時代の人々は、豊作への感謝の念をあらわす行動の1つとして、大聖堂の建設を行った。また、概して良好であった当時の食糧事情は、都市の人口だけでなく重労働や賦役などにより苛酷な暮らしを強いられていた農村の人口も増加させる要因になった。

ところが、比較的安定した気候が続いてきたそれまでとは異なり、14世紀に入ると気候が短期間に変動しやすくなっていく。1315年以降にヨーロッパ規模で続いた長雨は、穀物収穫量を激減させ、牛・馬・羊のような家畜の大量死を招き、深刻な大飢饉を引き起こした。農村の暮らしは一気に困窮し、都市には浮浪者が流れ込んだ。そこに戦争目的の重税が追い討ちをかけることになる。例えば、当時のイギリスはエドワード2世が統治していたが、彼は先王エドワード1世によるスコットランドへの

軍事介入を引き継ぎ、国民に増税を課した。結局、1328年まで続いた戦争でイギリスはスコットランドに敗北を喫するが、戦費調達のための課税は飢饉で疲弊していた国民にとって多大な重荷となったのである。

大雑把にいうと、14世紀の初めごろから19世紀の半ばごろまでの時期において、気候は寒冷化するとともに急激に変化し、予測不能となっていった。一般にこの時期は小氷河期と呼ばれている。

ただ、前述のような深刻な飢饉が数年間続いたとはいえ、14世紀初めは、全体的には比較的豊かな時期であったといわれている。しかし、(C) と呼ばれる疫病の大流行により、そうした状況は一変する。すでに13世紀からモンゴル帝国が形成され、モンゴル軍はユーラシア大陸の東から西へ破竹の勢いで進撃した。こうしたモンゴル軍のユーラシア大陸規模での移動に伴い、14世紀前半に中央アジアで流行し始めた(C) は、イタリアの諸都市をつうじて西ヨーロッパにも大流行した。これにより、ヨーロッパの人口は激減することになる。しかし、当時は1339年(1337年という説もある)に始まった(D) 戦争に絡んだ紛争が絶えなかったため、この人口の大きな減少にもかかわらず、多くの人々が食糧不足に苦しんだ。

1560年ごろから1600年ごろまでのヨーロッパは、低温かつ荒天に見舞われることが多かった。世界史との関連でみると、1580年代をつうじて続いた荒天は、スペイン無敵艦隊の敗因の1つでもあったという解釈もある。実際にスペイン無敵艦隊は、イギリスとの戦いで失ったよりも多くの船をこの悪天候によって失ったのである。

14世紀の初めごろから19世紀の半ばごろまでの小氷河期の気候変動は、生存のための食糧確保の重要性を従来以上に高めた。これが1つの要因となり、14~15世紀ごろにフランドルやオランダで農業革命が次第に起こり、17~18世紀の間にイギリスにも定着した。穀物のみを長期間栽培していた農地では、不可避免的に地力が落ちてしまう。そこで、この土地にクローヴァーのような牧草を栽培して牛にその牧草を食べさせると、その土地は次第にまた肥沃になり、穀物栽培に適するようになる。このような地力を回復させるサイクルをつうじて、土地の生産性は高まるであろう。また、ライ麦などを刈り取った直後にカブを植え、それをすぐに収穫して家畜の飼料にあてることも行われるようになった。

以上の新たな農法の代表例ともいえるのが、18世紀前半のイギリスで開発された

(E) 農法であろう。この農法では、土地を4つの区画に分け、大麦→クローヴァー(牧草)→小麦→カブ(飼料)という順番で1年ごとに植え、休耕地をなくして4年で一巡する四輪作制をとった。また囲い込みも、立ち退きを迫られた人々との摩擦を生じさせた一方で、土地の生産性を大きく高めた。^⑤

ジャガイモは、南アメリカから帰国したスペイン人によってヨーロッパに初めて伝えられたという。^⑥ヨーロッパの人々は当初ジャガイモに対して偏見をもっていたが、次第に人々の間に受け入れられていく。ただし、フランスの農民はジャガイモへの偏見が強く、18世紀の半ばに至ってもこの作物を敬遠しがちであった。他方、アイルランドではジャガイモがすぐに普及し、この作物のみに依存する状態を強めていった。

着実に進行した農業革命の結果、イギリスは以前に比べて凶作の被害を受けにくくなり、変動する気候のもとでも何とか食糧を確保できる状態に少しずつ向かっていった。他方、フランスでは総じて中世以来の農業が依然として続けられ、気候変動に対して脆弱な食糧供給状態が続いていた。フランスでは、国王や地主は概して大規模な農業改革に対する関心が薄かった。また、国王の大臣は織物などの製品や外国貿易を重視しており、農業にはほとんど大きな関心を抱かなかった。^⑦さらに、農民たちもジャガイモなどの新作物を受け入れるよりも、食用の小麦と換金作物としてのブドウという伝統的な生計手段に固執していたという。人口に対して土地が不足気味になっていた18世紀のフランスは、飢饉の影響を受けやすい農業の状態とあいまって、不安定な経済構造に立脚していたのである。そうした中で、1788年に深刻な食糧難がフランスを襲った。

もちろん、フランスではそれ以前から、戦争や浪費目的で重税を課す国王や免税特権などを享受していた貴族に対する不満が人々の間でたまっていた。にもかかわらず、財政改革を試みた(F)は国王ルイ16世から解任されてしまう。こうした政治的・経済的背景のもとに1789年にフランス革命が起こった。だが、この年に革命勃発の引き金を引いた要因の1つとして、過去数百年にわたって手つかずであった脆弱な食糧供給基盤を直撃した1788年以來の気候変動に注目する見方もある。^⑧

オランダ領東インド(現在のインドネシア)のタンボラ山で1815年に大規模な噴火が起こった。その規模は、過去1万5千年の間で最大であったという。この結果、大量の火山灰が数年間にわたって大気中にとどまり、それ以前よりも太陽光が遮断さ

れることになる。それゆえ、1816年は「夏が来ない年」といわれるほどの寒さを記録した。この結果、穀物は不作となり、穀物価格はヨーロッパ各地で高騰するとともに、人々は食糧難に苦しんだ。当時のイギリスは、20年以上も続いた戦争の終結に伴う軍事産業の縮小とヨーロッパ大陸からの陸海軍兵士の帰還のために、失業問題が深刻化していた。^⑩こうした状況下での穀物価格の高騰は人々の生活苦を招き、政府に対する抗議運動と政府の抑圧措置によって社会秩序が不安定化した。また、生存そのものを脅かされた人々がアメリカなどへの移民を加速させたが、そのアメリカでも寒さのために穀物の不作に見舞われた。

1840年代のアイランドでは、大規模なじゃがいも飢饉が起これ、多くの犠牲者^⑪が出た。前述のように、アイランドは、じゃがいもという単一作物だけに依存する状態を強めていた。だが地下で育つため気候変動に比較的強いとされ、栽培も容易で栄養もあるじゃがいもであっても、疫病を免れることはできなかった。1840年代半ば以降、アイランドでじゃがいもの疫病に伴う被害が深刻化し、特に1846年と1848年の凶作は壊滅的であった。この結果、アイランドでは100万人ともいわれる人々が命を落とし、この数に匹敵するほどの人々がイギリスやアメリカに移民せざるをえない状況に追い込まれたという。

14世紀の初めごろから始まった小氷河期の最盛期は、16世紀末ごろから19世紀半ばごろまでであったとされている。それ以降、世界は総じて温暖化の方向に向かっていく。19世紀半ばには、土地を求める大量の農民たちが、オーストラリア、ニュージーランド、および南北アメリカなどに移住した。彼らは移住先で多くの木を伐採して農地を開墾し、都市の発展のために薪や木材を提供した。このことを可能にした理由の1つとして、鉄道と外洋汽船の発達が挙げられる。その燃料でもある石炭はイギリスでは16世紀ごろから使用されていたが、産業革命以降に石炭に対する需要は急激に増加していく。その後、20世紀に入ってからアメリカで実業家の（G）によって自動車が大衆化され、また石炭から石油への燃料転換が起こると、大気中に放出される二酸化炭素の量はいっそう増加することになった。

このような人間の活動は、当時の温暖化傾向にさらに拍車をかけていく。その後、19世紀の末から20世紀の半ばごろまでと、1970年代の初めごろから現在までは、温暖化の時期といわれている。これを受けて世界各国は温暖化ガスの削減を目指してい

るが、他方で北極圏の氷が少なくなったことを背景に海底に眠る天然ガスなどの資源採掘ビジネスへの期待も高まっている。

問1 下線部①に関連して、人類の誕生に関する記述として誤りであるものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア. 類人猿とは区別される存在としての最古の人類は、猿人であった。

イ. 猿人の中には、簡単な打製石器を用いるものもあった。

ウ. ホモ=エレクトゥスという学名の原人は火を使用する者も現れ、狩猟・採集の生活を送っていた。

エ. 旧人の代表であるネアンデルタール人は、死者を埋葬する習慣をもっていた。

オ. アフリカに現れた新人は、南北アメリカ大陸以外の世界にほぼ住み着いた。

問2 下線部②に関連して、1295年に彼によって招集された議会の名前を答えなさい。

問3 下線部③に関連して、次のア～オの出来事を歴史の古い順に並べ替えなさい。

ア. ハイドゥの乱が起こる。

イ. アッパーズ朝を滅ぼす。

ウ. 西夏を滅ぼす。

エ. 金を滅ぼす。

オ. ワールシュタットの戦いに勝利する。

問4 下線部④に関連して、1577年から80年にかけて世界周航を成し遂げ、1588年のこの海戦でイギリスを勝利に導いた人物の名前を答えなさい。

問5 下線部⑤に関連して、以下の語群の中からもっとも適切なものを5つ選び、イギリスの第1次および第2次の囲い込みの特徴について120字以内で説明しなさい。なお、用いた語句には下線を引きなさい。

莊園, 牧場, プランテーション, 三圃制, 賦役, 綿花, 穀物, 農奴, 農業資本家, 砂糖, 羊毛, 国王, 議会, 不輸不入権

問6 下線部⑥に関連して、スペイン支配下でのインディオの悲惨な状況をスペイン国王に訴え、インディオの救済に努めた聖職者の名前を答えなさい。

問7 下線部⑦に関連して、ルイ14世の治世下で財務総監になり、重商主義政策を推進した政治家の名前を答えなさい。

問8 下線部⑧に関連して、フランス革命時の出来事に関する記述として誤りであるものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア. メートルという長さの単位の起源は、フランス革命期間中に度量衡の統一のために制定されたメートル法の制定にある。

イ. 19世紀の社会主義運動に大きな思想的影響を与えたといわれるバブーフは秘密結社を結成して蜂起を目指したが、事前に発覚して処刑された。

ウ. 国民公会では共和政開始の1792年9月22日を紀元とする革命暦（共和暦）が採択されたが、後にナポレオンによりグレゴリウス暦に戻された。

エ. 革命に対する農民層の支持拡大を狙って国民議会のもとで封建地代の無償廃止が確定・実施されたが、それにより土地を得た農民は保守的傾向を強めた。

オ. フランス古典主義絵画の代表者ダヴィドは革命当初はジャコバン派として活躍したが、後にナポレオン1世のもとで首席画家となった。

問9 下線部⑨に関連して、次のア～オの出来事を歴史の古い順に並べ替えなさい。

ア. アンボイナ事件が起こる。

イ. 強制栽培制度が実施される。

ウ. オランダ東インド会社がバタヴィアに要塞を建設する。

エ. オランダが東インド会社を設立する。

オ. ジャワ戦争が起こる。

問10 下線部⑩に関連して、ナポレオンの最終的敗北を決定づけた、1815年のナポレオン軍とイギリス・オランダ・プロイセン連合軍との戦いの名前を答えなさい。

問11 下線部⑩に関連して、アイルランドの歴史に関する記述として正しいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア. アイルランドにはケルト系の人々が居住していた。

イ. チャールズ1世はアイルランドを征服し、土地の没収を強行した。

ウ. アイルランドは1831年にイギリスに併合された。

エ. ディズレーリはアイルランド自治法案を提出したが、議会通过しなかった。

オ. 1905年にアイルランドの完全独立を求める労働党が結成された。

II 以下の文章を読み、空欄A～Oにもっとも適切な語句を記入し、設問に答えなさい。
ただし、同じ記号には同じ語句が入る。(50点)

7世紀にアラビア半島で成立したイスラーム教は、西アジアと地中海沿岸に徐々に広がり、7世紀末ごろからヨーロッパのキリスト教世界と接触し始めた。これ以降、イスラーム世界が与えたインパクトは、ヨーロッパの形成と発展にとって重要な役割を果たした。

西ローマ帝国の滅亡後、西ヨーロッパのローマ教会は、ビザンツ皇帝が支配するコンスタンティノープル教会から分離してゆく傾向にあったが、この傾向を助長したのがイスラーム教の成立であった。イスラーム勢力の伸張への対処を迫られたビザンツ帝国が、西ヨーロッパの政治と宗教への介入を控えざるを得なくなったのである。さらには聖像をめぐる対立が、東西の教会の断絶を深めた。726年、ビザンツ皇帝の(A)は、偶像崇拜を厳しく禁じるイスラーム教に対抗するために聖像禁止令を発した。しかしローマ教会は、ゲルマン人への布教の必要性から聖像を積極的に用いていたために、この禁止令を受入れることはできなかった。

そのころ西ヨーロッパのフランク王国ではクレータターが起り、メロヴィング朝^①にかわって宮宰のカロリング家が王位に就いた。カロリング朝は、その始祖カール・マルテルが庶子であったために、なおさら正統性に欠ける王権であり、そのために正統性を保証してくれる権威を必要としていた。一方のローマ教会も、ビザンツに対抗し、ビザンツから自立するためにも、世俗権力の後ろ盾を必要としていた。ここにカロリング家とローマ教会の協力関係が成立した。カール・マルテルの子(B)はイタリアのランゴバルド王国から奪ったラヴェンナ地方を教皇に寄進し、そのかわりに教皇はカロリング家がフランク王位を継承することを承認した。800年に(C)が教皇によってローマ皇帝として戴冠されるに及び、ようやく西ヨーロッパは政治的・文化的・宗教的に自立しはじめることになった。

ヨーロッパとイスラーム世界は、敵対しあう関係であったにもかかわらず、十字軍^②の時代を迎えるまでは、ヨーロッパ人がイスラーム教徒とじかに接する機会はほとんどなかった。その中でスペインは、キリスト教徒がイスラーム教徒と日常的に接する経験を持つことができた、ヨーロッパにおいては例外的な地域であった。711年に北

アフリカから対岸のスペインに侵入したウマイヤ朝のベルベル人部隊は、瞬く間に全土を制圧し、(D) 王国を滅ぼした。これ以降、スペインでは約 800 年間にわたるイスラーム支配が続くことになった。ただしキリスト教徒はイスラーム教への改宗を強要されることはなく、人頭税を払いさえすればもとの信仰を保つことができた。イスラーム教は、キリスト教徒とユダヤ教徒を「(E) の民」と呼び、その他の宗教とは区別し、共通の土壌にあるものとして理解した。だからこそイスラーム教は、キリスト教に対してときに激しい憎悪の念を持つことはあっても、全体としてはかなり寛容にその存在を認めた。

756 年には、アッバース朝の建国によって祖国を追われたウマイヤ朝の残党が (F) を首都として後ウマイヤ朝を成立させた。ここに建築されたモスクは最大で 2 万 5 千人を収容する大規模なものであった。このモスクは後にキリスト教徒によって再征服された際にキリスト教の大聖堂に転用され、メスキータと呼ばれることになった。(F) は、40 万冊を蔵する王立の図書館がもうけられるなど、ヨーロッパ最大の知的センターとなり、そこにはキリスト教世界からも留学生が訪れたほどだった。

中世のヨーロッパにはギリシアの古典はほとんど継承されなかったが、十字軍をきっかけに東方との交流が盛んになる 12 世紀には、アラビア語に翻訳されたギリシアの古典がイスラーム世界を介してヨーロッパに流入するようになった。12 世紀の (F) の哲学者であり医者でもある (G) は、古代ギリシアの哲学者である (H) の哲学を用いてイスラーム教の神学を体系化した。彼の著作はラテン語に翻訳され、キリスト教の聖職者たちの読むところとなった。その方法論は、スコラ哲学の中心地であったパリ大学にも衝撃を与えた。ドミニコ会士の (I) は、このイスラーム経由の方法論をキリスト教にも適用することによって、キリスト教の神学を体系化した。

ヨーロッパがイスラーム世界の現実的な脅威にさらされたのは、オスマン帝国の時代になってからであった。オスマン帝国は 1402 年にティムール軍に敗れて一時的に勢いを失うが、再興した後の発展はめざましく、スルタンの (J) は 1453 年にコンスタンティノーブルを攻略し、ビザンツ帝国を滅ぼした。この事件は、オスマン帝国の脅威が間近に迫っていることをヨーロッパの人々に知らせることになった。そ

れだけでなく、ビザンツの学者たちがイタリアに逃れ、それまで西ヨーロッパでは失われていたギリシア語の知識と古典古代の貴重な文献をもたらしたために、ルネサンスの人文主義の発展に寄与した。またオスマン帝国が東地中海の制海権を掌握したためにアジアとの陸路交易が困難になったことは、コロンブスらによるアジア航路開拓へとつながるなど、大航海時代の前提条件となった。

⑤
スレイマン1世のもとで最盛期を迎えたオスマン帝国は、1529年にウィーンを包囲してヨーロッパ諸国に大きな脅威を与えた。ウィーン包囲は結局は失敗に終わったが、この事件はヨーロッパの宗教改革の行方に重大な影響を及ぼした。ルターが宗教改革を始めた当初は、ルター派は政治的な力を持たなかったため、神聖ローマ皇帝でありカトリックの守護者である（ K ）は、軍事力によってルター派を封殺できると考えていた。しかし折からのオスマン帝国軍の進撃に対処するために、彼はルター派と妥協せざるを得なくなった。こうしてカトリック教会からのルター派の分裂は決定的になった。⑥

オスマン帝国は、軍事力だけではなく、外交力によってもヨーロッパ政治の動向を左右した。（ L ）家と敵対関係にあったヴァロワ家のフランスとは、通商上の特権である（ M ）を付与することによって友好関係を築き、ヨーロッパ政治を分断することに成功した。

1571年の（ N ）の海戦では、スペイン・ヴェネツィア・教皇庁の連合艦隊がオスマン帝国の艦隊に勝利した。この海戦は、今日でもその勝利を祝福する行事が行われるほどの出来事としてヨーロッパの人々の間で記憶されているが、実際にはこのときの敗戦によってオスマン帝国の力が決定的に衰えたわけではない。それどころか17世紀後半に至ってもその版図はスレイマンの時代以上に拡大していた。1683年の第2次ウィーン包囲に際しては、ヨーロッパ側は、オーストリアとポーランドが連合軍を組んで迎え撃たなければならないほどであった。しかし第2次ウィーン包囲が失敗すると、オスマン帝国の優位は失われた。ついには1699年の（ O ）条約によって、オスマン帝国はハンガリー、トランシルヴァニアなどをオーストリアに割譲し、ヨーロッパから後退してゆくことになった。

問1 下線部①に関連して、フランク王国とローマ教会の関係はメロヴィング朝の始祖クローヴィスの時代に遡るが、クローヴィスとローマ教会の関係について以下の語句をすべて用いて100字以内で説明しなさい。なお、用いた語句には下線を引きなさい。

正統, 異端, アリウス派, アタナシウス派, ゲルマン人

問2 下線部②に関連して、第1回十字軍の結果パレスチナ地方に成立したキリスト教国家の名称を答えなさい。

問3 下線部③に関連して、この人頭税の名称を答えなさい。

問4 下線部④に関連して、9世紀にアッバース朝のカリフによって設立され、ギリシアの古典の蒐集やアラビア語への翻訳を組織的に行ったギリシア文化の研究機関の名称を答えなさい。

問5 下線部⑤に関連して、大航海時代はカトリックの布教活動によって世界的にキリスト教が拡大した時代であったが、同時にイスラーム教も拡大していた。16世紀に現在の(ア)イランと(イ)インドに成立したイスラーム王朝(帝国)の名称をそれぞれ答えなさい。

問6 下線部⑥に関連して、神聖ローマ帝国の領邦君主に対してカトリック派カルター派の宗教選択権を認めた帝国議会が開催された都市名を答えなさい。



